

■新連載■

ピアノコンチェルトの魅力



会報CDトラック44~53
コンチェルト演奏&
山脇一宏先生トーク付き



〜フードで地区予選を切る!〜

地区予選のスケジュール

●前日リハーサル

ソリストと指揮者・エレクトーン2台編成の伴奏者の初合わせ。本番よりも長めの時間を取り、演奏・打ち合わせを行う。

●審査当日

前日と同じ顔ぶれで演奏。特に子供の場合、リハーサルより格段に演奏が良くなる。

子供がコンチェルトを弾く、というのは実際どうなのでしょう？

6月12日、13日東京地区を皮切りに福岡・大阪・名古屋でコンチェルト部門地区予選が行われました。予選現場に関わった5名の方から、それぞれの立場で見た「コンチェルト」のお話を伺ってみました。

キーワード1. コンチェルトってアンサンブルの塊だあ〜。 キーワード2. コンチェルトって意外と簡単だあ〜。

まずは、6月19日開催の福岡地区予選を聴きに來られた2人の方の声です。

とても楽しかったです。何といっても上級のラプソディ・イン・ブルーは、ひいている本人があまりに楽しそうだったので安心して、何よりこちらも楽しかったです。(中略)指揮者の方の講評はとても参考になるもので、(中略)来年はもっときいて勉強する人、受けて勉強する人の両者から増えていったら良いなあ…とつくづく思っています。」

(以上抜粋、福岡市在住 久保山千可子氏)

「エレクトーン二台とのコンチェルト」初めて来場致しました。生のオーケストラとの大きな違いを感じたものの、エレクトーンという多楽器分を重ね合うことのできる電子楽器の特徴を生かして、コンチェルトを身近に体験できるというすばらしさをまず感じました。(中略)コンクールでこんなにも出番を“待ち望んでいました”という印象をうけるなんて…とうれしくなりました。本人の熱気とまわりの応援が、会場内に満ちていました。練習での曲のむかいあい方も、他の音のことを考え、きっとすばらしい、うきうきした心をもって達成へとむかったのではと思います。又、自分に合う曲選びの重要性を考えるのにも良い機会が得られるのではと思います。入選された方は、ご自分の演奏を良くわかっ

ていらして、一つ一つの音符の動きに対しての配慮と指をピアノにのせるときの美しさの追求が見られ、責任を持って役割をと、指揮者の方の音楽とむきあっていてすばらしい演奏でした。一つ一つの呼吸が音楽(曲)にいぶきを与える喜びをコンクールの中で感じられたらどんなによいでしょう。」

(福岡市在住 橋本幸子氏)

なぜ当日会場で初めて演奏を聴いた方が、このように感じたのでしょうか？お2人の感想には、コンチェルトを体験する際の重要なポイントが含まれています。第1にアンサンブルの楽しさ、次に共演者との緊張感あるコミュニケーション、そして最後に、そのコミュニケーションを通して自分自身の音楽性を発見すること。感想を聞かせて下さったお2人は、審査当日会場ではじめて演奏を聴いてそれを感じ取られたようですが、実際の音楽づくりは前日のリハーサルで始まっていました。

下の表は、今年行われたある地区予選の前日リハーサル進行表です。コンチェルトは、前日と本番の2日間を合わせてひとつの体験となるよう時間割が組まれています。共演者である指揮者・伴奏者はこの時間をどのように使っているのか、現場の模様を聞いてみました。

リハーサルの進行表をご覧いただくと休憩時間が多くとられていることにお気付きになると思います。(2グループの伴奏者が交替でリハを行なうことにより、順番に休憩をとる場合もあります。)この間、実は伴奏者控え室では、指揮者を中心に綿密な打ち合わせが行なわれているのです。同じ曲でも、ソリストによってその音楽は千差万別です。指揮者・伴奏者(今回の予選では2名)は、翌日の本番で出来るかぎりソリストそれぞれの魅力を引き出して、最高のアンサンブルを!と願っているのです。まさに、1曲1曲が真剣勝負ですが、それがアンサンブルの醍醐味でしょう。本番でいい音楽が出来たとき、その充実感をソリストと一緒に味わえることは、共演者にとって一番嬉しいことです。「一人として同じではない音楽性のどれもが、感動体験に結びつく。」そんな二日間になることを願っています。」

(1997年度 伴奏者 藤井祥子氏)

このようにしてソリストは指揮者・伴奏者との役割分担の中で、自分のパートを一生懸命演奏するうちに、音楽全体をより大きなスケールで捉えることが可能となります。まさにアンサンブルの醍醐味が凝縮されていると言えるでしょう。

今回福岡地区予選に参加した指導者の方から、予選終了後電子メールで感想と要望を頂きました。こ

「今回で3どめのトライですが、いつもながらコンチェルトのコンクールに参加して良かったと心より感じています。何故参加者が増えないのが疑問です。そして、今回特に良かったです。(中略)リハーサルでは、短い時間の中、初級などは、演奏時間をカットしても3分くらいしかアドバイスを受ける時間はなかったのですが、その短い時間の中、指揮者の先生には端的に、判りやすく、指導いただきました。一人で作っているのではなくお互いに心を通わせて一つの音楽を作るために心をさく、どんな方にもより良い音楽になるように、最大限のアドバイスをいただきました。そこに純粋な音楽に対する姿勢、真摯な気持ちが伝わり生徒達も感動し、幸せだったと思います。いっしょに演奏する楽しさを感じさせて下さる先生でした。(中略)勉強するには、絶対にリハーサルを聴くべきですね。(中略)できれば、せつかくの経験ですから、もう少し時間をいただきたいです。本番よりもリハーサルで。」(鹿児島市在住 池川礼子先生)

級	演奏時間	1人あたり演奏時間	曲目	伴奏グループ	
初級	13:00~13:20	約8分	ハイドンピアノ協奏曲ハ長調 第1楽章	B	
		約8分	越部信義 おもちゃのチャチャチャ	B	
	10分休憩				
	13:30~13:50	約8分	越部信義 おもちゃのチャチャチャ	B	
約8分		越部信義 おもちゃのチャチャチャ	B		
10分休憩					
中級	14:00~14:50	約11分	モーツァルト No.26 Kv537 第1楽章	B	
		約11分	グレンツキ 若きショパン風ピアノ協奏曲No.2	A	
		約11分	モーツァルト No.26 Kv537 第1楽章	B	
		約11分	ハイドン D HobXVIII/11 第1楽章	B	
10分休憩					
上級	15:00~15:50	約15分	ショパン 第1番 小短調Op.11 第1楽章	A	
		約15分	ベートーヴェン第2番ハ短調 Op.37 第1楽章	B	
		約15分	ショパン 第1番 小短調Op.11 第1楽章	A	
	10分休憩				
	16:00~16:50	約15分	ガーシュイン ラプソディ・イン・ブルー	B	
		約15分	グリーグ 短調 Op.16 第1楽章	A	
約15分		ベートーヴェン第2番ハ短調 Op.37 第1楽章	B		

表) コンチェルト部門地区予選の前日リハーサル進行表

ここにその一部をご紹介します。

コンクールという場でありながら、それ以上の体験をされたようです。この電子メールは当初事務局あてに頂きましたが、事務局から指揮者の先生に転送したところお返事を頂くことができました。

「これからが楽しみな、小さな音楽家”や”コンチェルトが大好きなピアニスト”のみならず、少しでも素敵な音楽を作り上げたいと(体験したい)いつも思っているということ、限られたリハーサル時間ではありましたができる限りのコミュニケーションをし、音楽的にインスピレーションやアイデアを交換し合えたことが演奏の楽しさにつながってくれたのだと思います。

もちろん、それが演奏者だけではなく、リハーサル、本番を問わずその空間と一緒に居合わせたみなさんと共有できたということもたいへん幸せに思います。音楽は時間芸術であるとともに、空間芸術(だから生演奏は感動できる)でもあると信じていますので。

こうして、肩肘張らず自然体で”音楽”を楽しんでいれば、それが周りにも伝わっていくようです。まず自分自身が楽しまなければ。(あたりまえのことですが)」

(1999年度 福岡/大阪地区予選指揮:吉田裕史氏)



ソリストに加えて、指揮者、伴奏者、そして指導者。様々な要素から、当日の音楽体験は作られています。「かわいい子には旅をさせろ」と言いますが、まずは指導者として実際にリハーサルと本番を聴いてみる・感じてみるが必要かも知れません。

キーワード3. かわいい子には旅をさせろお～。

音楽をスケール大きく学ぶ方法として、次号からピアノコンチェルトを様々な角度から見て行きます。音楽ジャンルの一つとして以上に、これからの指導法の一環として、またその他の様々な可能性を検証して行きたいと思います。

第23回ピティナ・ピアノコンペティション コンチェルト部門 全国決勝大会

【日程/演奏曲目】

■8.18 (水) オケ合わせ

*入場無料・整理券あり

11:30～ 初級 (小6以下)

14:30～ 中級 (中3以下)

16:30～ 上級 (年齢制限なし)

■8.19 (木) 本番/審査

*曲目変更の可能性あり

10:00～ 初級 (小6以下)

ハイドン (保坂千里編) : ピアノ協奏曲ハ長調第1楽章
平吉毅州 : こどものためのコンチェルティーノ
越部信義 : ピアノとオーケストラのためのおもちゃのチャチャチャ

11:30～ 中級 (中3以下)

ハイドン : ピアノ協奏曲ニ長調 Hob.XVIII/11第1楽章
グレッキ : 若きショパン風ピアノ協奏曲第2番

14:30～ 上級 (年齢制限なし)

グリーグ : ピアノ協奏曲イ短調 Op.16第1楽章
ショパン : ピアノ協奏曲第1番ホ短調 Op.11第1楽章
ガーシュイン : ラプソディ・インブルー

【会場】

北とびあつつじホール
(JR王子駅北口/南北線王子駅5番出口より徒歩2分)

【協力】

ヤマハエレクトーンシティ渋谷

【入場料】

全自由席 : 一般 2,000円
会員・学生 1,500円

【指揮】

吉田裕史 (初級・中級)

東京音楽大学指揮科卒業。同大学研究科修了。指揮を沼澤安彦、広上淳一、津田雄二郎各氏に師事。大学在学時より、主にオペラの分野において研鑽を積む。これまでに「フィガロの結婚」「コシ・ファン・トゥッテ」「ラ・ボエーム」を指揮。1996年8月、イタリアで開催された第19回「マスター・プレイヤーズ」国際指揮者コンクールにおいて入賞。現在、市川交響楽団、船橋フィルハーモニー管弦楽団、TAMA21交響楽団等の指揮者として、アマチュアオーケストラの活動に尽力。

遠藤浩史 (上級)

桐朋学園大学オーケストラ研究生指揮専攻科に学ぶ。指揮を、尾高忠明、小澤征爾、秋山和慶、岡部守弘、湯浅勇治の各氏にそれぞれ師事。卒業後は群馬交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団、東京ユニヴァーサルフィルハーモニー管弦楽団、東京合唱協会等に客演し。1996年、ハンガリーの国際バルトークセミナーにて、ファイナルコンサートの指揮者に選ばれ、ヴァリア交響楽団を指揮。現在、東京合唱協会指揮者。東京指揮研究会幹事、日本演奏連盟会員。

【オーケストラパート】

■初級・中級 : エレクトーン2台による電子オーケストラ

伊藤佳苗 (国立音楽大学ピアノ科卒。ピアノを菅野洋子、ヘルムート・バルトの両師。オペラの全曲演奏等、国内外で多角的に活動。)

塚瀬万起子 (武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを坂井玲子、永岡信幸、エレクトーンを柏木玲子の各氏に師事。オペラの伴奏他、国内外で幅広く活動)

■上級 : エレクトーン3台による電子オーケストラ

山脇一宏 (国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。同大学大学院音楽研究学科学科ピアノ専攻修了。ウィーンにてストラヴィンスキー「春の祭典」をエレクトーンで演奏し脚光を浴びる。貞静学園講師。国立音楽大学ピアノ科講師。昭和音楽大学電子オルガン科講師)

海洋幸子 (武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。野呂愛子、瀬津裕子、牧野真員の各氏に師事。ピアニストとして活躍する傍ら、エレクトーンでの数十曲に及ぶオペラの演奏等活動の場を広げる。ミラノ・スカラ座のディアツ氏、ピサーニ氏に高く評価される。)

藤井祥子 (武蔵野音楽大学ピアノ科卒、ピアノを歌田紀子、平尾康子、宮下和子の各氏に、エレクトーンを山脇一宏、桑原巖の各氏に師事。)

作曲家研究

その<12>



ドメニコ・スカルラッティ

ドメニコ・スカルラッティのソナタは、ピアノを本格的に勉強する上でできて通れない作品と考えられているようで、ピティナの課題曲にも毎年取り上げられています。18世紀の前半に書かれたスカルラッティのソナタは、当然のことながらチェンバロで弾かれることが想定されていました。現代のピアノで弾く上でも、できればチェンバロによる演奏も聴き、作品の特徴を自分なりに捉えたいものです。



会報CDトラック7

会報編集・広報委員
久元 祐子

1 スカルラッティのソナタ

○イタリアからリスボン、そしてマドリードへ

ドメニコ・スカルラッティ (1685-1757) は、ナポリに生まれたイタリア人です。ヴェネツィアやローマで活躍した後、ポルトガルの首都リスボンで宮廷楽長に任命され、王女マリア・バルバラの音楽教師になりました。いったんイタリアに戻りますが、再びリスボンに行き、王女がスペインに嫁いでいくとき、王女とともにマドリードに行きます。生涯をこの地で過ごし、モーツァルトが誕生した翌年に亡くなりました。

スカルラッティは、王女のチェンバロの練習のために沢山の練習曲を作曲しました。それらが今日「ソナタ」として残されている作品群です。

○スカルラッティのソナタ

スカルラッティの存在は、彼の死後忘れられていたようで、モーツァルトの手紙の中にもスカルラッティの名はほとんど登場しませんが、19世紀に入ると、ピアノの教材として広く使われるようになりました。

スカルラッティは、当時ヨーロッパの辺境であったイベリア半島にいたこともあり、既にパリやロンドンで行われていたような、作品番号がついたきちりとした形で作品が出版されることはありませんでした。多くは写本の形で流通したため、それぞれの曲の作曲年代や曲の構成などはよくわかっていません。このため後世の研究者がスカルラッティの作品の整理を行っており、その代表が、アレッサンドロ・ロンゴとラルフ・カークパトリックです。スカルラッティのソナタにつけられている記号のLとKは、この二人の名前の頭文字をとったものです。

今日出版されている楽譜を見ると、スカルラッティ

のソナタは、単一の楽章からできています。これに対し、それぞれのソナタは2曲あるいはそれ以上の組み合わせで、組曲やソナタを構成したのだ、という考え方も古くからあり、永遠に解決できない問題かもしれません。

2 スカルラッティの作風

その生涯も、また作品の成立も詳しいことがわかっていないにもかかわらず、スカルラッティのソナタは、多くの名演奏家によって弾かれ、愛されてきました。とくにホロヴィッツはとても個性的で素晴らしい演奏を入れていました。また、今年で没後40年になる女流ピアニスト、ヴァンダ・ランドフスカは、チェンバロによる自在な演奏とともに、スカルラッティに対する熱烈な愛情を文章として残しました。ランドフスカはこう書き残しています。「しばしばスカルラッティは、技術的に法外にむずかしいソナタの作者でしかないと考えられている。断じてちがう！彼のほんとうの方は、疾走や、バッテリーや、走句や、滝となってほとばしり出る彼のダイナミックな烈しさにあるのである。」(「ランドフスカ音楽論集」みすず書房)

個々の作品に即しながら、スカルラッティの作風と、その演奏上の留意点について、私なりにまとめてみたいと思います。

○爽快なスピード感

チェンバロは、現代のピアノとは比べものにならない軽いタッチで弾くことができました。18世紀前半、チェンバロの鍵盤上を自由自在に指が動き回る、いわば名人芸を披露できる鍵盤作品がたくさん創られましたが、スカルラッティのソナタもそのような音楽の典型です。特に彼のソナタの速い作品には、とりわけ、疾走する爽快なスピード感が溢れて

PTNA

ピティナ事務局コンクール事業部

TEL : 03-3944-1583 E-mail : compe.piano.or.jp